

令和7年2月18日

隠岐支庁 農林水産局 農業振興部

標 題 島前・島後間での「耕畜連携」を進める研修会を開催

(ダイジェスト)

隠岐島農業士会では、2月6日（木）に隠岐合庁と島前集合庁舎や県庁を結んで「隠岐島耕畜連携推進研修会」をオンラインにより開催しました。研修では、耕畜連携の県内先進地の一つである大田市で稲わら収集と堆肥散布を行っている2つのコントラクター組織（いずれも合同会社化）のキーマンである、生越大地指導農業士から先進事例を報告してもらいました。

畜産農家にとって、昨今の子牛価格の低迷や飼料価格の高騰により、自給飼料の確保は喫緊の課題となっています。一方、耕種農家にとっては、近年の気象状況の変化によって高温障害（一等米比率の低下）が起りやすくなっており、土づくりを始めとした基本的な耕作技術の徹底が重要となっています。

隠岐の島町では、農業産出額の75%を畜産が占めていますが、放牧主体の飼養管理であるため、牛糞は牧野に還元され、耕種農家が利用できる完熟堆肥は限定的です。一方海士町では、稲わらと堆肥の交換を耕畜間で行っていますが、町内の水稲作付面積は約80haであるため、稲わらの供給量、堆肥の消費量は共に限定的です。

そこで、島前・島後間または島内（島後）での稲わらと堆肥の交換を進めることにより、自給飼料の確保と土づくりの励行を進めるため、まずはそのキッカケの場として「隠岐島耕畜連携推進研修会」を2月6日（木）に開催しました。なお、本研修会は、島前・島後及び県庁等をオンラインで繋いだハイブリット形式で行いました。

研修会では、大田市久手町を中心に稲わら収集を行っているアグリスマイル合同会社と堆肥散布を行っているアルバFC合同会社の取組状況について、（株）わなかの代表でもある生越大地指導農業士から講演をしてもらいました。残念ながら当日は飛行機が欠航し、生越氏は県庁からのリモート講演となってしまいましたが、2つのコントラクターの組織運営のポイントや稲わら収集作業の勘所を惜しげもなく披露して頂き、今後の隠岐島内での耕畜連携を進めていく上で、とても参考となる貴重な情報をお聞きすることが出来ました。



講演後の質疑応答では、島前・島後両会場から質問が挙がり、参加者の高い関心・意欲がうかがえたことから、今後の耕畜連携を実践していくにあたっての理解を耕種農家や畜産農家から得られやすくなったと思います。